

<研究報告>

ハイテク都市深圳から見える中国という「くに」とその未来
—霞んで見える輝ける西洋近代—

The growing Shenzhen high tech city implies the future of Chinese regime

小門 裕幸
Hiroyuki Kokado

ハイテク都市深圳から見える中国という「くに」とその未来

—霞んで見える輝ける西洋近代—

法政大学地域研究センター客員教授（名誉教授） 小門 裕幸

要旨

シリコンバレー研究者が、始めて改革開放40年の中国・深圳を訪問記である。日本の近代という時代を踏まえ西洋文明・東洋文明の視点からヌエのような「くに」中国について考えたことをエッセイ風にまとめたもの。

フィクションとして美しい世界をつくった西洋に対し歴史の荒波をくぐり生き延びてきた人々の造る社会の凄さを訴えている。現実主義でデファクト主義で易姓権威主義と統治的功利主義で世界を変えてしまうかも知れない。その危険性を説く。

The growing Shenzhen high tech city implies the future of Chinese regime

Hosei University Center for Regional Research, Visiting Professor
Hiroyuki Kokado

Abstract

An essay written by a Silicon Valley specialist who paid visit to Shentzen, China for the first time. A Beautiful world as a fiction vs a bare world made by wild individualistic Chinese people.

Westerners vs easterners. Chinese people will pursue their own original world based on Ekisei-based authoritarian regime making the best use of AI. It will be big concern for us.

1) 中国という「くに」

私は、昨年2月、始めて中国深圳を訪問した。驚愕した。凄まじい。社会主義市場経済システム。改革開放後の中国は一つの新しい「くに」のかたちを提示しつつあるのではないかと。中華人民共和国。人類史上稀にみる14億になんなんとする人々を束ねて行政が行われている。政治的には自由は認めず非民主的。日本と同じく市民社会として成熟した「くに」ではない。しかし、この「くに」には、「易姓革命」という儒教に基づいた社会通念がある。徳が失われた王朝（姓）に対して天が見切り（天を革める）をつける。厳然として民を束ねる社会秩序がもたらされてきたのである。そして経済は治政の安定を前提に駆動してきた。

今回も、政治的安定が与えられる中で、実験都市としての深圳が大成功を収めたのである。共産主義ながら、私的所有権という概念を導入し、自由競争と利潤動機を機能させている。中国は列記とした資本主義国家である。そもそも深圳というところは何もない寒村であった。そこが高々40年でシリコンバレーに比肩する世界のハイテク産業都市に成長したのである（人口31万人

<1979>→1250万人）。深圳という地方都市を含め、中国という「くに」は事実上分権国家である。そこには、中華（漢人）社会の地域自治的伝統的統治システムが鎮座しているといった方がよい。共産党政権も例外ではない。分権的構図の上で機能している。このシステムは10世紀の宋の時代にさかのぼる。皇帝がいて、中央政府は、科挙の制度が生み出すエリート官僚システムによりがちり固められ、もう一方の地方は、その首長は中央政府から任命されるが、秩序の源泉は族長を頂点とする血縁や苗字によって結ばれる宗族制度にある。宗族制度は広大な中国の隅々まで行き渡っているという。この中央と地方の、皇帝による官僚直接統治と地方の宗族による地域統治の二重構造が中国社会の秩序を維持してきたのである。

2) 米国は囲い込み政策から封じ込め政策へ

深圳の人々は政治は不自由だが、経済は自由の社会を生きている。彼らはそれで充分だとし人生を謳歌しているように見える。中国の改革開放政策は軌道に乗っている。自由で民主でと調整に時間がかかる世界より明らか

に経済効率は高い。このままいくと米国経済も10年以内に中国に抜かれてしまう。

ワシントンの空気が夏ごろから急変したという。躍進する中国経済と伝統的な中華的・東洋文明的・覇権的な政治の仕組みに米国覇権の危うさを感じ取ったのである。西洋文明の危うさに気付いたのである。トランプという特殊個性的な人物の繰り出す政策に対してではない。米国の知識層が真剣に深刻に、この事実を受け止め始めたのである。これまで途上国に対してはエンゲージメント（囲い込み同化）政策により寛容に対処していた米国がコンテインメント（封じ込め）政策に大きく舵を切ったのである。新冷戦という言葉がまことしやかにかわされ始めている。事態はここまで進んでいる。

3) 西洋近代と愚直だった日本人

澁刺として仕事をこなす深圳の経済人をみていると、彼らの経済システムに郷愁を覚えるのはどうしてなのだろうか。少なくとも十分魅力的だ。我々も坂の上を見つめて澁刺と生きた時代があった。明治期は「文明開化・殖産興業」と叱咤激励され近代化の道を歩んだ。その道は今の中国のような統治の仕組みではなかったか。天皇を頂点とした優秀なエリート官僚の統治システムの下、江戸時代に培われた地域の自治組織が生んだ有能な人材に支えられて、明治維新後の奇跡の資本主義化（西欧列強に仲間入り：帝国主義化）を実現させた。しかしながら、未熟な近代化の末路は天皇を神格化し人民を結集させた大戦争という愚挙に帰結する。そして、敗戦後は幸運にも、米国の庇護のもと経済に邁進できる環境に恵まれ、欧米が驚く奇跡の経済復興をなし遂げることができたのではなかったか。

そして、確かに、日本はモノづくりという点では西洋近代が生み出したレベルを凌駕した。しかし、その近代は個が自立し思考し自主的に行動して市民社会を構築していくとする西欧近代の精神が生み出したものではなかった。個々人は相変わらず群れることで安心を得、迎合し徒党を組むことを良しとする人々であり、行動原理には変化はみられず、村落共同体的マインドが会社共同体マインドに転移し、引き続き勤勉に働いただけではなかったか。自主自尊の精神をもち孤高とし、自由闊達に議論を尽くし意思決定し、市民意識（シティズンシップ）がイノベーション（アトレプレナーシップ）を掻きたてる英米的な世界では決してなかった。日本という「くに」は西洋近代の精神は置き去りにしている。日本では自由で民主で寛容でイノベティブという価値観は個々人の人格の発露としてあるものではない。それらの概念は記憶の対象として暗記はされるが、本質が理解されているわけではない。

西欧の人々は、彼らがつくり上げたこの社会はフィクションであることを自覚している。百点満点ではない。だからこそ、常に変革を求める。自省的生活を常とし、時間軸をもって未来を見つめている。子供や孫の時代を考えるとという習性がある。営々と築きあげた近代という美しい「大きなものがたり」に対して、冷静に終焉を予告し、ポストモダンに挑んでいるように見える。中世の時代、教会を介して神を崇めた彼らは、宗教革命を起こし神を自分たちの身近なものとし、そして自分たちを中核とする市民社会を創ったのちは、神は自分たちの信じるもの、いわば市民的価値となる。人間至上主義であり、かけがえのない存在である人間を神とするものである（公共宗教/市民宗教）。そして、だから、今は、個の存在、個の尊厳を揺るがす存在になるAIに対し強い危機意識をもって臨んでいるのだ。

4) 中国という「くに」の強靱さ

人類史上最大の「広くて大きくて深く多様な」中国という異形の社会では、多種多様な生身の人間がぶつかり合い、その結果としての、ある種の、複雑系でいうカオスの縁と呼ばれるダイナミックな秩序が生まれている。そして、複雑系でありながら、そこには巨大な「くに」中国という社会なりに「ゲームのルール」が成立している。それは西洋規範的ではない。日本人の本音・建前を使い分けるようなものでもない。生身のデファクト主義とでもいうべき彼らの行動原理がそこにはある。私は、つまるところ、彼らのこのような生き方・生活の仕方に、中国という社会の強靱さを感じてしまうのである。美しい虚構である西欧文化に対し、デファクトで物事を進めていくが故に、中華的文明の方が西洋文明より、強いのではと思ってしまうのである。統治の仕組みも個々人の行動原理においても、彼らの方が強いのではと考えてしまうのである。

5) 深圳という急成長の実験都市

深圳は今や人口1200万人、GDPは香港を抜き（一人当たりGDPは東京都の3の2、経済成長率なお実質10%）、シリコンバレーと比肩する世界のハイテク産業地域に変容した（面積・人口は東京都とほぼ同規模）。中国における国際知的財産申請件数の約5割が深圳発であり、その増加率は年率50%増（1.9650万件（2016））と凄まじい。投資機関であるVC・PEの数が約5万社、資金総額が約50兆円といわれている。全国・全世界から約3千の研究機関（約100カ国）が集結し、研究開発契約・アライアンスが実践されている。中山大・香港中文大・清華大・UC Berkelyなど、名だたる大学がキャンパスをオープンし、バーチャル大学パークも発

足、清華大、北京大など 国内大学 44、香港大など 6 大学が参加。研究開発機関 (262)、国際研究機関 (7 所) も参加している。共同研究室も 1493 に上り、そこにはノーベル物理学賞・化学賞科学者も参加しているという。また、BAT・Apple・Microsoft・Qualcomm などの企業研究開発センタも進出している。世界トップ 500 の 199 社が拠点をもちこの地域のグローバル性を物語っている。イノベーションのスピードも新規登録企業数: 56 万社 (2016 年) 2.5 人の中 1 人は創業者: 総企業数の約 7 割が 2014 から 2016 の起業と若く、地域の平均年齢約

30 才、と凄まじい (深圳大学の資料による)。私たち日本人の想像を絶する世界である。日本人が想定する信頼という社会インフラはないが、セキュリティシステムの間人関係 (グワシン) の仕組み (宗族制度) には盤石の歴史を重ねている。

個々人が、非団体的で人間として強い。そして個々人同士のネットワーク力に優れる。逞しさの塊のような彼らは、日本人に比べ遥かに資本主義的な人々ではないか。突如、深圳という言葉ば自由の新天地 (新世界) が与えられ、人々 (自由人) が結集した。アングロサクソ

柔軟な三極構造と完成したサプライチェーンとグローバルなエコシステム

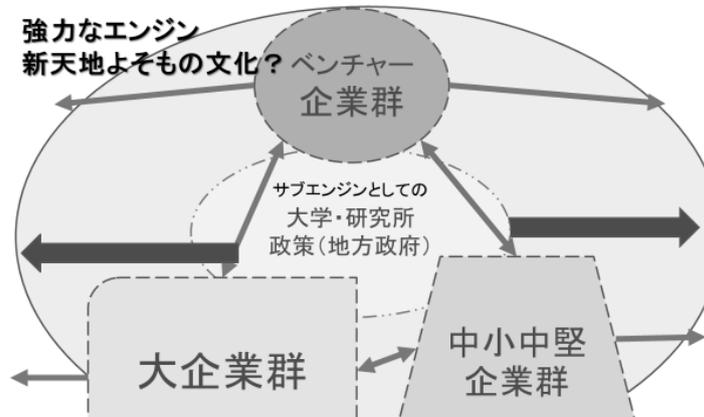


図 1

時代に適応した高度な電子機器サプライチェーンとIDH 独特のゲームのルールの下に展開する産業組織

Public board (半導体?)
Public mode (金型)

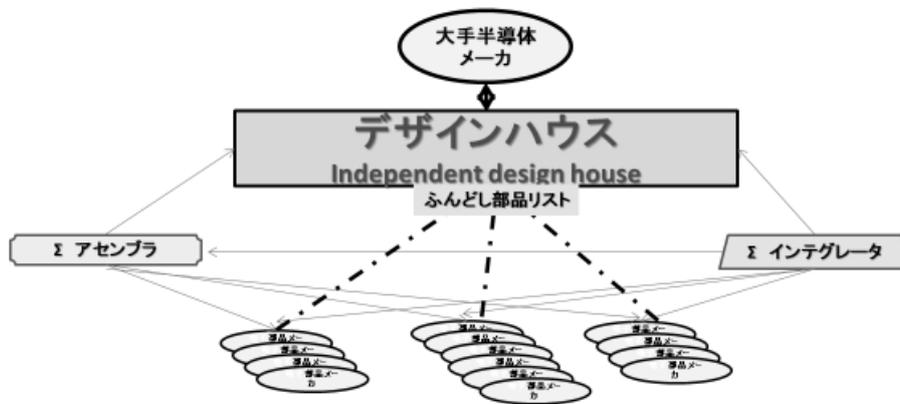


図 2

ンの近代的ビジネス手法を知悉する香港人・華僑、そして台湾の人々を迎え入れ、深圳に集う中国の人々は瞬間に、水を得た魚のように、貨殖的に（経済合理的）によそ者同士の新しい世界をつくってしまったのではないか。「よそもの集団による複雑系的自生的ビジネス秩序」

が形成されてしまったのである。そこには中国の伝統社会で培われた幫的絶対的信頼とネットワーク性という習性が活かされ、儒教的信条が道徳的規範が根底に流れている。さらには、タイミング的に激動する第四次産業革命という世界史の大波をとらえてしまったのである。ソ

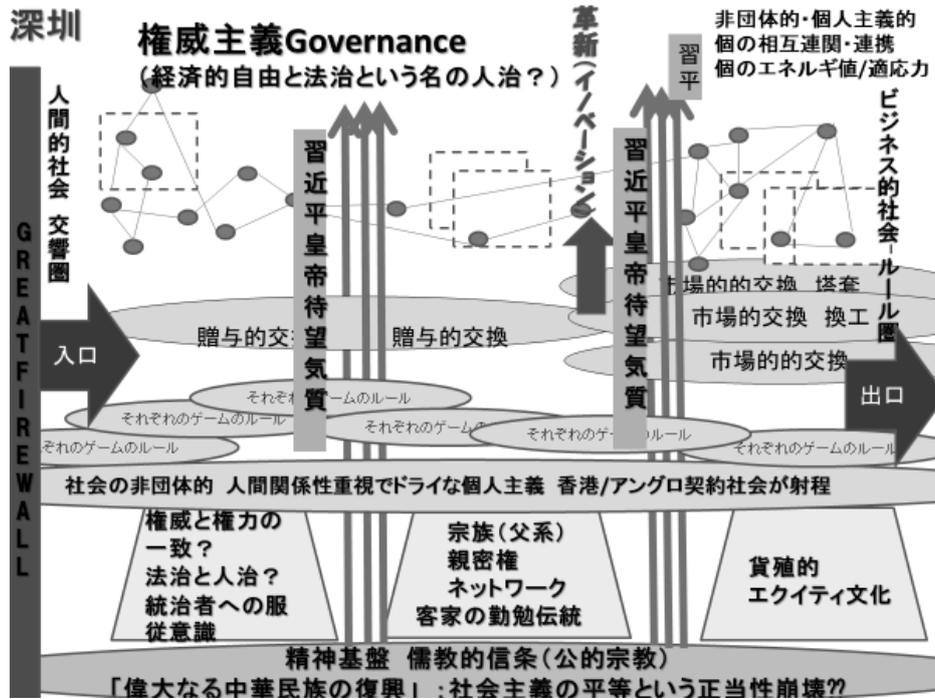


図 3

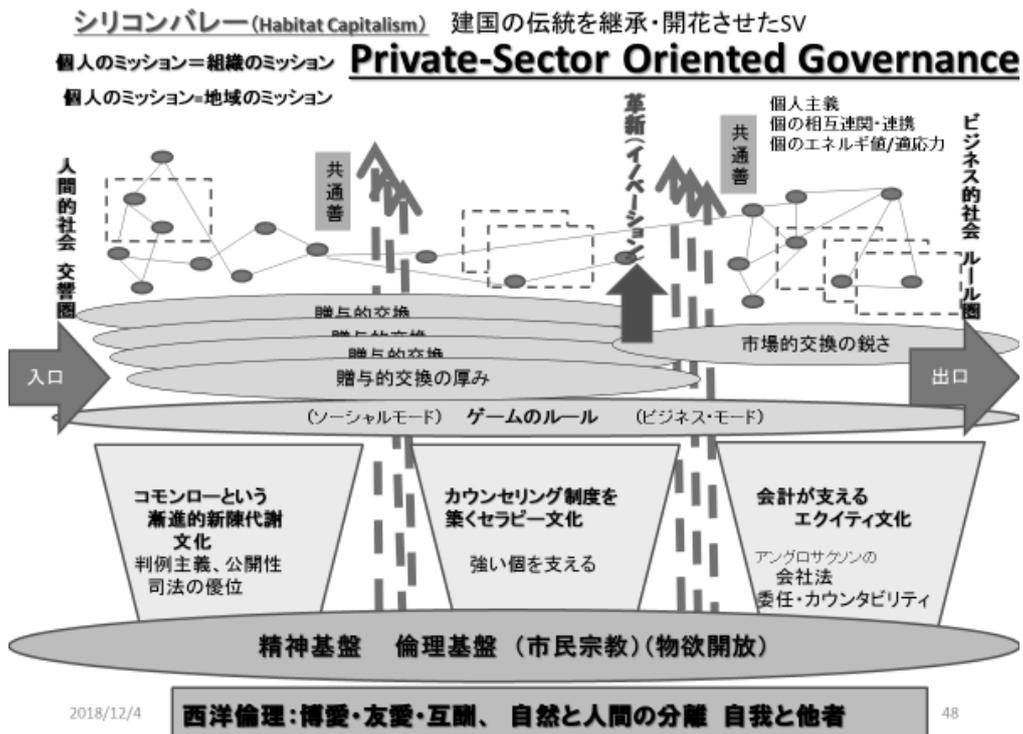


図 4

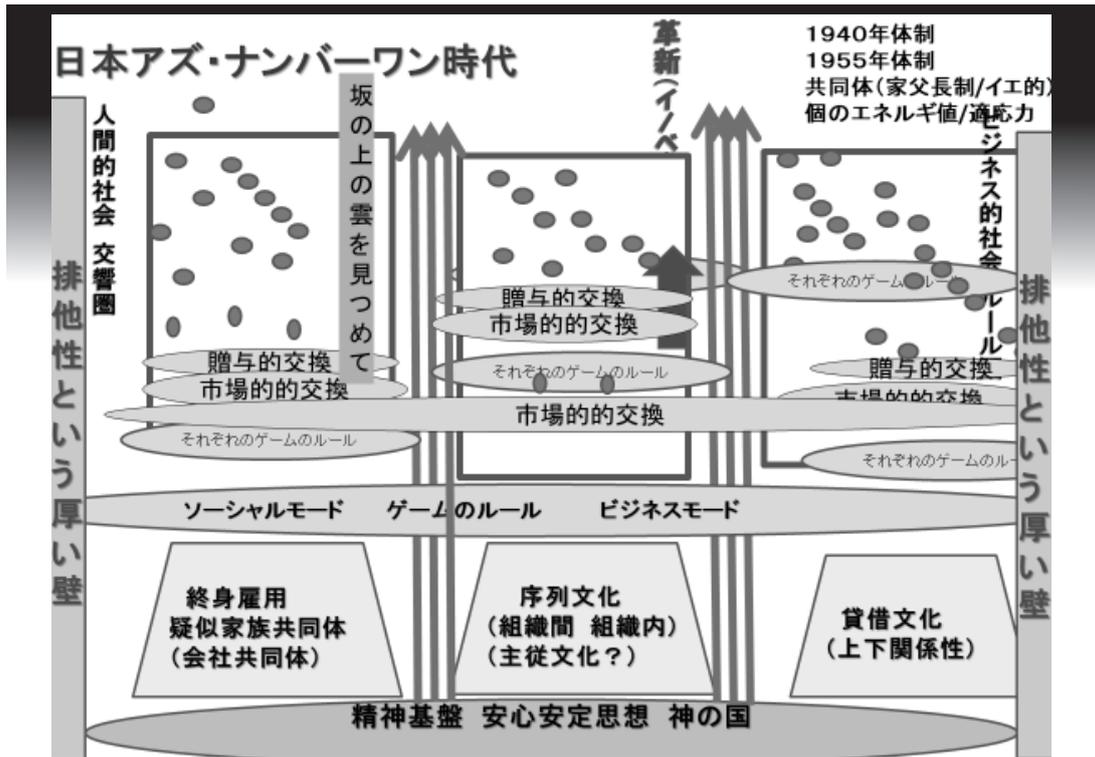


図 5

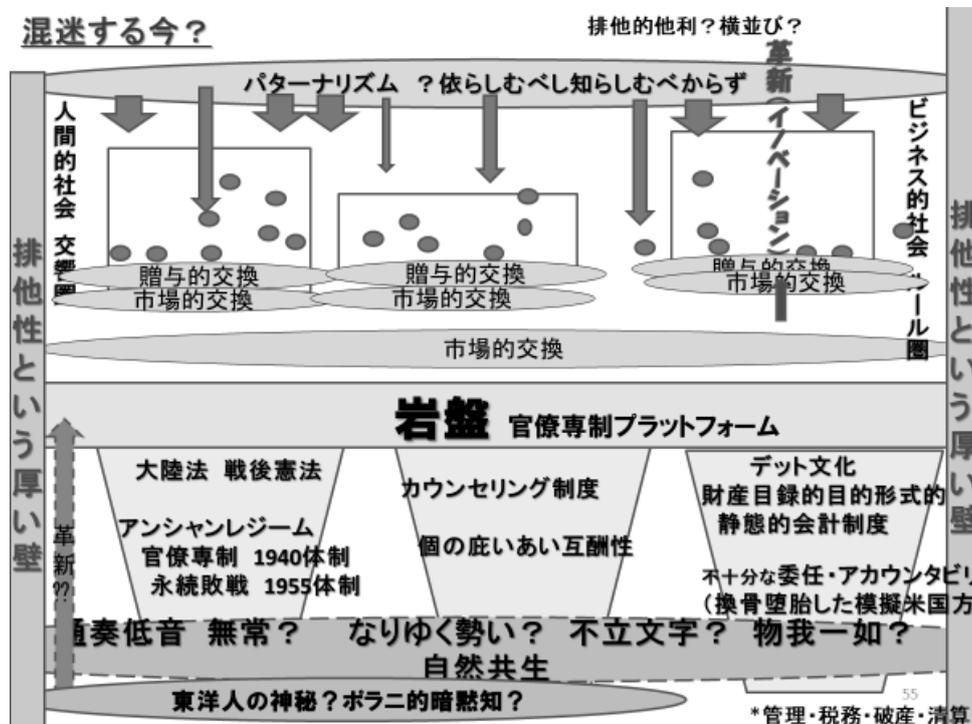


図 6

ビエト・東欧の社会主義経済圏の崩壊と日本型製造業モデルの崩壊を尻目にグローバル化デジタル化の波を乗りこなしているのである。

深圳は中進国の罫を乗り越える。人件費は 2010 年代

に入り昂騰。EMS を典型とする労働集約的製造業モデルは後退し、アウトカムエコノミの時代を新たな経営原理を異にする三つのタイプの企業群からなる産業構造に脱皮している。それらは、グローバル化した大企

業群、ハイテクモノづくりのサプライチェーンを形成する中小企業群とグローバルなエコシステムに支えられるベンチャー企業群という三つの企業群である（図1、2参照）。そしてアジャイルで元気な中国の人々のモビリティがそれぞれのグループをつないでいる。深圳という地域は、シリコンバレーというオープンイノベーションの基本を文化的にも産業組織論的にも具備しているのである。地方政府も地域間競争を勝ち抜くために、地域振興・地域開発に躍起である。地域に派遣された共産党官僚はそこでの成果が昇進と直結している。深圳地方政府は勢いある地域経済人をサポートし地域経済を支える。それが彼らにとって得策なのだ。地方政府が地域経済のサブエンジンとして機能しているのである。言い換えると、自立的な業者が集まり互いに競い合う中でゲームのルールが創生され、地域としてのアイデンティティが形成されている。コミュニティキャピタルが存在すると言いたくなる。弱いつながりとコミュニティのゲームのルール、一つの産業集積モデルとしても興味深いものである。

なお、深圳経済はシリコンバレーと比肩する存在になっており、私の推計ではGDPではシリコンバレーを越えている。しかも、深圳とシリコンバレーとは、よその文化を形成することや社会構造において、詳細は別稿に譲るが、一部ここでも紹介した通り、共通する点が多く、いずれもオープンイノベーションの構図を明快に説明できるのである（図3、4参照）。日本については、高度成長期には経済の力強さ、イノベーションの可能性を描けるが、残念ながら、現代はイノベーションに至る社会のエネルギーが描けない（図5、6参照）。

深圳は、鄧小平のいう雑種ねこが内外の境界を越えて集まり疑似シリコンバレー文化を創生し、世界のハイテク産業地として生まれ変わったのである。鄧小平の願いを叶えたのである

6) 中国という「くに」のイメージをより深めるために

中国という文明に関心を持ち沢山の文献を読ませてもらった。中でも『橋玲の中国私論』（橋玲『言ってはいけない中国の真実』）が学術的論文ではないが、多元的に立体的に中国社会を巧みに描写しており、異空間のイメージを膨らませてくれる。彼、橋玲の言葉をいくつか紹介して、中国という「くに」のイメージ、中国人像をリセットしていただければ幸いである。

中国人には信用という資源が枯渇している（p37）。それは中国には人間があまりにも多いのだ（p37）。歴史的・文化的要因から社会資源としての信頼＝絆が常に不足していた（p67）。彼らは相手を騙すということではない。

広い国土と多すぎる人口を背景に、中国では郷党と宗族という人的何とワークに頼って寄り添い社会を生きぬいていくライフスタイルが確立した。この人的ネットワークが中国を理解するキーワード「関係（グワシン）」だ（p530）。・・・広大な中国では移動（流浪）が避けられないから、場所を基準とした社会秩序は意味がない（p54）。

「自己人（インサイダ）」とは・・・100%信用できる相手のことだ。人間関係でもっとも大切なのは血縁だが情誼（チンイー）を結んだ朋友も自己人の内に入る。・・・中国人の行動文法は裏切ることで得をする機会を得たときに、それを躊躇なく実行することを道徳的に悪と考えない（p63）。

中国人社員は組織（会社）ではなく個人単位で物事を考えるから、競争や信賞必罰に抵抗がない。考え方が論理的で納得できないことには従わないから・・・（精神論は通用しない）（p71）

「改革開放」というのは、中国の人々にとっては、「共産党の支配を容認する代わりに自分たちの金儲けには口を出させない」という暗黙の契約だった（p177）。

たくさんの贈与を行えるというのは、それだけ権力をもっている、という証明でもある。・・・相手はそれに匹敵する返礼をするか、全財産を指しだして支配下にはいるしかない。このようにして「贈与すればするほど得になる」という経済合理的な戦略が成立する。（p185-186）。

孫文は「まだ中国人という国民意識がなく人民が民主主義を理解していない・・・あまりに広く公正な選挙が物理的に不可能・・・中国人が愚民であり賢人による支配が必要」と軍政や訓政の必要性を説いた（p281）。

「愚かな人民はエリートに支配された方が幸福だ」という典型的な愚民主義で、儒教的な価値観から強い影響を受けている（p282）。

革命の正当性を失っても共産党支配が続くのは・・・中国の人々は独裁に苦しんでいるが独裁を必要としてもいる（p284）。

7) 易姓革命とAI/ 統治的功利主義への懸念

中国は「広く・大きく・深く・多い」、人類史上まれにみる超大国である。複雑極まりない中国では、儒教が底流に流れ、易成革命という統治思想が徹底される。倫理意識のある国家でもある。功利主義による統治という考え方がある。統治功利主義とは「統治者が最大多数の最大幸福を目指して制度設計し政策運営を行う統治の手法」のことと理解される。

2017年末グーグルの創業会長シュミットが辞めた。その時彼はグーグルがAIで中国に後塵を拝している旨を告げた。テンセントとアリババの決済金融革命はAIの成果である。アリババのジャック・マー退任を巡っては、習近平が浙江省時代からの付き合いのあるジャック・マーを引き抜いたとのうわさもある。中国はAI大国まっしぐらである。すでにウイグル自治区でのAI監視社会が実行に移されている。AIという武器を利用し

て、中国の伝統である易姓革命統治が行われるとすれば、それは功利主義という大義名分を持ち込み AI を権威として掲げ、権威主義国家を完成させてしまうのではないか。14 億という人々をまとめあげるにはこれしか方法がないのではとも思う。この手法で専制国家を巻き

込み、世界の覇権を企てるやもしれぬ。AI 時代を迎えるにあたって、今、法哲学ではまことしやかに統治功利主義が議論されていると聞く。様々な問題をはらむ功利主義である。その功利主義が皮肉にも統治功利主義として中国において完成されつつあるのではないか。

参考文献

- 小門裕幸 「ハビタット資本主義の登場、シリコンバレー社会を複雑系とキャリア理論で読み解く」法政大学キャリアデザイン学部紀要 2018/3
- 潘燕萍 pyp@szu.edu.cn“Shenzhen: A House of Innovation & Entrepreneurship” 深圳大学管理学院 2018/2
- ユヴァル・ノア・ハラリ 『ホモ・デウス』(上) 河出書房新社 2018/9
- 近藤大介 『二〇二五年日中企業格差』PHP 新書 2018/9
- 梶谷懐 『中国経済講義』中公新書 2018/ 9
- 橋玲 『言ってはいけない中国の真実』新潮文庫 2018/ 4 (2015 週間ダイヤモンド連載)
- 田中明彦 「貿易戦争から「新しい冷戦」へ」2018/11 中央公論
- 此本臣吾監修 森健・日戸浩之 『デジタル資本主義』2018/5 東洋経済
- 阿南友亮・江藤名保子 「中国共産党政権と日本」経済教室 20180524 & 25
- 伊藤亜聖 「加速する中国イノベーション」やさしい経済学 2018/3/20~29
- 矢吹晋 『中国の夢』2018/3 花伝社
- 小野塚知二 『経済史』2018/3 有斐閣
- 足立啓二 『専制国家史論』2018/2 ちくま学芸文庫
- 西口敏宏・辻田素子 『コミュニティキャピタル論』2017/12 光文社新書
- 藤岡淳一 『ハードウェアのシリコンバレー深圳に学ぶ』2017/11 インプレス
- 安藤馨 『統治と功利』勁草書房 2017
- アーサー・クローバー / 東方雅美訳 『チャイナ・エコノミー』2016 白桃書房
- 西谷修 『アメリカ異形の制度空間』2016 講談社メチエ
- 丸川知雄 『現代中国』2015 有斐閣
- パトリック・フリデンソン (著), 橋川 武郎 (著) 『グローバル資本主義の中の渋沢栄一』2014 東洋経済新報社
- 丸川知雄 『経済大国化の軋みとインパクト』2013 東大出版
- 丸川知雄 『チャイニーズドリーム』2013 ちくま新書
- 安藤馨 「統治理論としての功利主義」2011/11 日本法哲学学会
- 与那覇潤 『中国化する日本』2011 文芸春秋
- 石川好 『中国という難問』2008NHK 出版
- 小山勉 『トクビル』2006 筑摩書房
- 高橋和之 『立憲主義と日本国憲法』2005 有斐閣
- 渡部亮 『アングロサクソン・モデルの本質』2003 ダイヤモンド
- 今井仁司 / 三島憲一 / 鷲田清一 / 野家啓一 / 矢代梓 『現代思想の源流』2003
- 笹倉秀夫 『法哲学講義』2002 東京大学出版会
- 森嶋通夫 『思想としての近代経済学』1994 岩波新書
- 山之内靖 『ニーチェとウエーバ』1993 未来社
- M. フリードマン 『東南中国の宗族組織』弘文堂 1991
- 須山卓 「華僑社会における幫派主義と経済」長崎大学 研究年報 1975

雑誌記事など

- (source : http://www.sz.gov.cn/cn/zjsz/gl/201708/t20170824_8237780.htm)
- 「デストピアからの悲鳴—脅える 1100 万のウイグル族—」日経ビジネス 20181112
- 「拡大する中国ニューエコノミ」2018/5 DBJ
- 「米中危機」エコノミスト 20180529
- 「中国・深圳の製造ベンチャー誕生の背景と今後の展開」三井物産戦略研究所 2017/3
- ウエッジ 2018/3 「中国 大衆創業・万衆創新」
- IDE JETRO 2016/11 「中国：深圳のスタートアップとその後のシステム」
- エコノミスト 2018/3/20 「爆速イノベーション 中国の技術」

研究報告

訪問先

日系電子機器メーカー / 電子部品商社 / ものづくりベンチャー / 深圳大学 / 華強北インキュベーター